



Title	アヴァンギャルドの人類学：オルタナティヴ・スペースがつくる芸術とオルタナティヴ・スペースの芸術化
Author(s)	登, 久希子
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54020
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（登久希子）	
論文題名	アヴァンギャルドの人類学： オルタナティヴ・スペースがつくる芸術とオルタナティヴ・スペースの芸術化
論文内容の要旨	
<p>本論文は、現代のアーティストたちが試みるアヴァンギャルドの芸術がいかに西洋近代的な芸術觀を乗り越えていくのかを考察するものである。本論文でとりあげるフランクリン・ファーネス・アーカイブ(Franklin Furnace Archive, Inc. 以下FFと略記する)は、1960年代末から1970年代にかけてニューヨークで興隆したオルタナティヴ・スペースのひとつである。オルタナティヴ・スペースとは、当時の美術館や商業ギャラリーでは取り扱われない作品形態を発表するための場としてアーティストたちの手で設立・運営してきた。それは大きく第一世代と第二世代に分類できる。第一世代のオルタナティヴ・スペースは、既存の芸術とは異なる芸術を目指したが、組織としての運営という観点は導入されず短命だった。第二世代のオルタナティヴ・スペースの特徴は、アーティストがアドミニストレーター的な役割を兼ね備え、非営利組織として運営を行う点にあった。第二世代のオルタナティヴ・スペースに関わるアーティストたちは、近代以降の芸術において画商や批評家、キュレーター等の職に分業化されてきた実践を一手に引き受けた。FFはそのような第二世代のオルタナティヴ・スペースのひとつである。本稿ではFFの設立者であるアーティストのマーサ・ウィルソン(Martha Wilson)に着目し、「アート・ワールド」に関わる従来の議論では十分に説明できないアヴァンギャルドの試みを当事者の視点や経験から解明した。</p> <p>本論文は、FFの変遷に沿って議論をすすめる。第1章「オルタナティヴ・スペース前夜」ではFFが対抗する近代芸術觀とその制度について確認し、コーポラティヴ・ギャラリーや1960年代のアーティストによる反戦活動等の先例と比較することでオルタナティヴ・スペースの特徴を明らかにした。</p> <p>第2章「オルタナティヴ・スペースという企て」においては、アーティストたちによる自由な芸術活動としてはじまったオルタナティヴ・スペースに矛盾が見出されていく過程を追った。批評家も、実際に活動に携わるアーティストたちも1) オルタナティヴ・スペースの提示する既存の芸術とは異なる芸術が既存の芸術觀に基づいて評価されること、そして2) それらの活動が公的助成をうけていることに矛盾を見出し、1) と2) を因果関係にあるものとして語りだす。そのような「矛盾」を理由に活動を終えた第一世代のオルタナティヴ・スペースと異なり、第二世代はそれらに矛盾を見出さない。第二世代の一例として、ここでFFの変遷をまとめた。</p> <p>第3章「マーサ・ウィルソンの『芸術』」では、FFの設立者であるウィルソンがどのように自身をアーティストと、そして彼女の制作物を芸術作品として位置づけていくのかを明らかにした。FF設立はアーティストとしての自覚を得たウィルソンの「アイデンティティ」の構成要素として必要だった。このときウィルソンにとって、アーティストとFFのディレクターという在り方がどのように切り離されたものとして位置づけられていたのかを考察した。</p> <p>第4章「フランクリン通りにて」では、FFが扱ってきた代表的な芸術形態であるアーティスト・ブックとパフォーマンス・アートを軸に、生活世界に根ざした「ふつうのもの」としての芸術作品の周囲でうまれるゆらぎを指摘し、それぞれの作品形態が近代芸術において想定してきた独立した言説空間を超えていくものであることを確認した。</p> <p>第5章「文化戦争と失われた場所」では、パフォーマンス・アートの唯一性の担保となっていた場所を失ったあと、FFがインターネット上を活動の場として見出していく過程から、彼らがいかに従来の閉じた言説空間としての「アートワールド」からパフォーマンス・アートをとりだし、生活世界へと近づけていくのかを明らかにした。</p> <p>第6章「フランクリン通りを離れて」では、ウィルソン自身の「アイデンティティ」の変化とFFがすすめるアーカイブ化／歴史化がいかにアヴァンギャルドの芸術を完遂するものであるのかを考察した。ウィルソンは、これまでアーティストであることとFFのディレクターであることを分離したものとして生きてきた。FF自体がアヴァンギャルドの作品のようなものとして見なされるようになると同時に、ウィルソンは彼女のふたつの立場が切り離せないものにあることを見出す。FFが提示したアヴァンギャルドの芸術実践は、生活世界を芸術に近づけるのではなく、芸術を生活世界へともたらすことで、徹底して自律した領域としての芸術を無化するものである。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　(　登　久　希　子　)	
	(職)
論文審査担当者	氏　名
主　查　教授	中川敏
副　查　教授	栗本英世
副　查　准教授	白川千尋
副　查　准教授	森田敦郎

論文審査の結果の要旨

本論文は緻密なフィールドワークに基づいて、アメリカを舞台にして展開されている芸術運動、いわゆる「アバンギャルド芸術」を人類学的に分析したものである。近年の人類学的芸術論が、ともすれば、人類学が得意とした「現地の人の視点」を忘れ、機能主義的・社会学的であったのに対し、学位申請者は「現地の人の視点」にこだわって、アバンギャルド芸術の生まれる様を描いていく。議論は、参与観察そして多くのインタビュー、公私を含めたアーカイブの調査に基いて展開され、たいへんに説得的である。

本論文で申請者、登がとりあげるのは、オルタナティヴスペースの一つである、フランクリン・ファーネス・アーカイブ(Franklin Furnace Archive, Inc. 以下FFと)であり、とりわけその創設者であるマーサ・ウィルソンである。

第1章「オルタナティヴ・スペース前夜」ではFFが対抗する近代芸術觀とその制度について確認し、コーポラティヴ・ギャラリーや1960年代のアーティストによる反戦活動等の先例と比較することでオルタナティヴ・スペースの特徴があきらかになる。

第2章「オルタナティヴ・スペースという企て」においては、アーティストたちによる自由な芸術活動としてはじまったオルタナティヴ・スペースに矛盾が見出されていく過程が追われる。批評家も、実際に活動に携わるアーティストたちも (1) オルタナティヴ・スペースの提示する既存の芸術とは異なる芸術が既存の芸術觀に基づいて評価されること、そして(2) それらの活動が公的助成をうけていることに矛盾を見出すのだ。そして (1) と (2) を因果関係にあるものとして語りだす。そのような「矛盾」を理由に活動を終えた第一世代のオルタナティヴ・スペースと異なり、第二世代はそれらに矛盾を見出さない。そのような第二世代の例として FF の設立が描かれる。

第3章「マーサ・ウィルソンの『芸術』」では、FFの設立者であるウィルソンがどのように自身をアーティストと、そして彼女の制作物を芸術作品として位置づけていくのかが分析される。FF設立はアーティストとしての自覚を得たウィルソンの「アイデンティティ」の構成要素として必要だったのである。このときウィルソンにとって、アーティストとFFのディレクターという在り方がどのように切り離されたものとして位置づけられていたことが指摘される。

第4章「フランクリン通りにて」では、FFが扱ってきた代表的な芸術形態であるアーティスト・ブックとパフォーマンス・アートを軸に、生活世界に根ざした「ふつうのもの」としての芸術作品の周囲でうまれるゆらぎが指摘される。それぞれの作品形態が近代芸術において想定してきた独立した言説空間を超えていくのである。

第5章「文化戦争と失われた場所」では、パフォーマンス・アートの唯一性の担保となっていた場所を失ったあと、FFがインターネット上を活動の場として見出していく過程が描かれる。彼らがいかに従来の閉じた言説空間としての「アートワールド」からパフォーマンス・アートをとりだし、生活世界へ近づけていくかが描写される。

第6章「フランクリン通りを離れて」では、ウィルソン自身の「アイデンティティ」の変化とFFがすすめるアーカイヴ化/歴史化がいかにアヴァンギャルドの芸術を完遂するものであるのかが示される。ウィルソンは、それまでアーティストであることとFFのディレクターであることを分離したものとして生きてきた。FF自体がアヴァンギャルドの作品のようなものとして見なされるようになると同時に、ウィルソンは彼女のふたつの立場が切り離せないものにあることを見出す。FFが提示したアヴァンギャルドの芸術実践は、生活世界を芸術に近づけるのではなく、芸術を生活世界へともたらすことで、徹底して自律した領域としての芸術を無化するものである。

当論文の物語の一つの筋は、伝統的な画商・美術館・批評家システムへのアバンギャルド芸術の挑戦である。もう一つの筋はマーサ・ウィルソンの人生を辿りながら、浮かびあがってくる「芸術家」の定義である（「芸術」の定義ではない）。それは「アイデンティティ」「職」「役割」といったさまざまな言葉で表現される。その定義はゆれ動きながらも、マーサの中でじょじょに形をとっていくのである。その二つの物語が最終章で統一されることになるのである。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。